

## 三条西実隆画像模写記録

村岡 ゆかり

一九九七年四月より、十一月にかけて、三条西実隆画像（二尊院所蔵）の模写を行った。この画像は借用が困難であったため、原本の代わりとして写真撮影したものを基に模写を行う方法をとった。

以下はその記録である。

### 一、原本

所蔵／二尊院

素地／絵絹

装丁形状／掛幅装

顔料（肉眼での推定）／墨・胡粉・黄土・白緑・緑青・岱赭・弁柄・金泥

・丹・臙脂

原本の状態／絵絹に剝離剝落・亀裂・横折れが見られ、数箇所補綴・補彩が行われている。また、畳の緑青、畳縁・衣・画賛の胡粉、顔の顔料に剝離剝落が見られた。特に畳縁は、描かれている模様がわからないほどの剝落であった。変色は、畳部分の緑青に見られた。

### 二、模写

#### (1) 材料

和紙／楮紙（楮一〇〇％、Ph値七・三、紙舗「直」製）  
顔料／墨・胡粉・黄土・白緑・緑青・岱赭（黄口）（赤口）・古代岱赭・弁柄・コチニール・丹・金泥  
拵着剤／三千本膠（水二〇〇ccに対し、三千本膠一本の割合の水溶液）  
筆／水筆・彩色筆・面相筆・平筆・刷毛

#### (2) 模写の手順

- ① 京都国立博物館で原本の写真撮影を行った。（便利堂撮影）  
その際、あらかじめ用意した色カードを使って色合わせを行い、原本の色を調査した。また、顔の様子や画賛にある模様など、細部を観察し、詳細に記録した。
- ② 撮影してきたカラー写真を原寸大に引き伸ばす。
- ③ 和紙に礬水を引く。
- ④ ②の写真の上に③の和紙を置き、墨のみを用いて、墨で描かれた部分の上げ写しを行う。
- ⑤ 墨による上げ写しが完了後、薄めた顔料を使い、絹地・衣・顔・畳の上げ写しを行う。
- ⑥ ⑤の和紙を裏打ちした後、仮張りに貼る。（本所技術官中藤靖之氏による）

⑦ 京都国立博物館に出張し、原本の観察を再度行った。

その際、作業途中の模写・原寸大写真との比較を行い、詳細な記録を取った。

⑧ 彩色を行う。使用した顔料は【図】に示した通りである。

画賛【図】 a の下地は、原本が描かれた当初はおそらく丹・臙脂・胡粉の混色であったが、現在の状態は汚れ等の影響で発色が悪くなっている、と推定した。そこで模写は、丹・臙脂・胡粉の混色のみを使用した場合、発色が強すぎてしまうと考え、弁柄・胡粉の混色を主に使い、最後に丹・臙脂・弁柄の混色を薄く塗るという作業を行った。

⑦ 彩色後、墨線を描き起こす。その後、全体に古色をつけて完成させた。

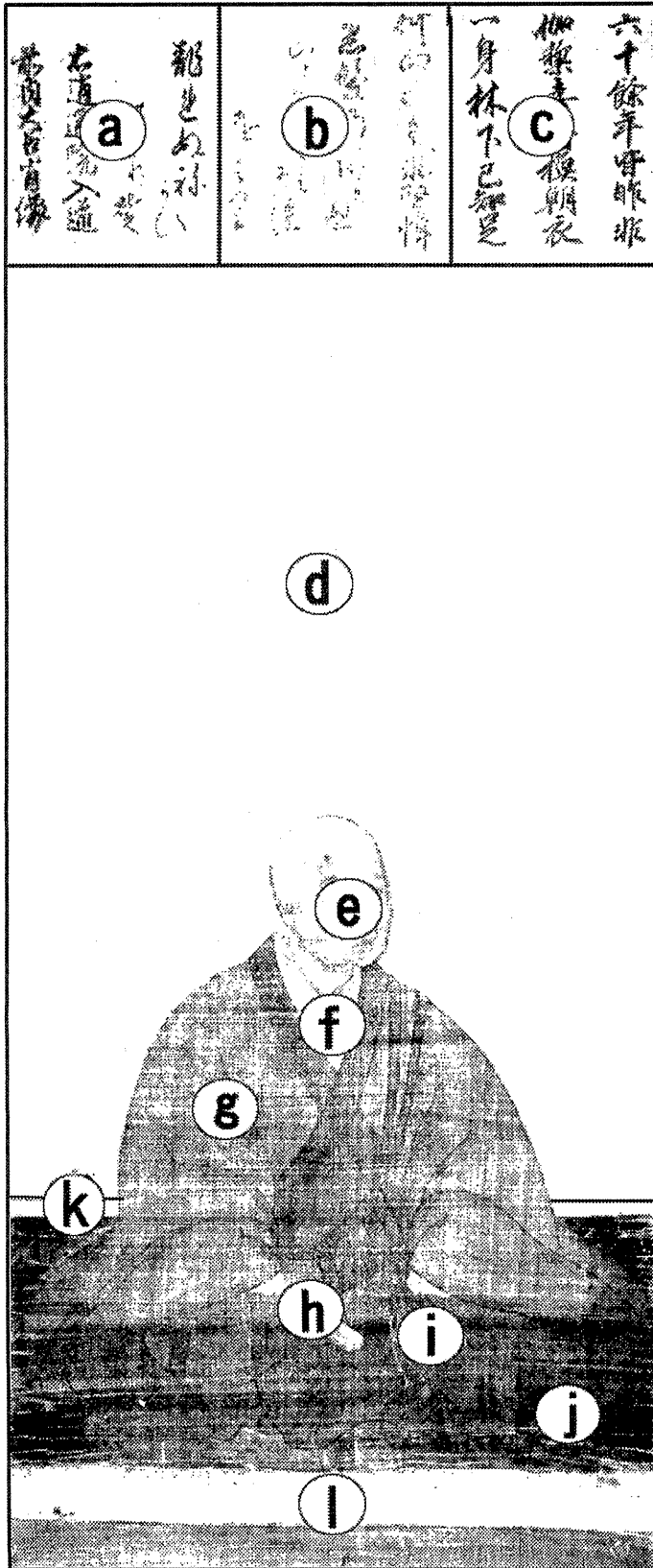
### 三、制作を終えて

原本の借用が出来なかったため、模写は、原寸大に引き伸ばした写真と詳細に記録した色カード・メモを必要とした。この原寸大に引き伸ばした写真のプリントの色は、原本の色調と比較すると黄味がかっている。また、全体的に地が透けたような質感になってしまっており、光の反射により色が薄く見える部分もあった。

それに対し、実際の原本の状態は、写真に比べて赤味が強い。絵の具の密度も濃く、全体的な調子は、顔の表情が目立たないほど暗く沈んだ色調であった。

今回のように原本を借用できない場合、彩色における色の濃淡や着色の位置などは、原寸大写真を参考に行われることになる。前述のような理由から彩色の作業では、原寸大写真の印象や色調に引き寄せられる事がないよう、詳細に記録した色カードやメモを読み返しながら行わなければならない。

また、原本の画賛には薄く金泥で蝶の絵柄が描かれてあったが、原寸大写真には写っていないかったため、調査の際の詳細なスケッチを基に描写した。



【図】

- a 弁柄+胡粉、弁柄、墨、  
金泥、弁柄+コチニール  
+丹
- b 胡粉、袋赭（黄口）+胡  
粉、墨+胡粉、墨、金泥
- c 胡粉+青墨、墨、金泥
- d 袋赭（赤口）+胡粉、袋  
赭（黄口）、袋赭（黄口）  
（赤口）+古代袋赭  
補絹/古代袋赭、黄土  
（中口）+袋赭（黄口）
- e 胡粉+袋赭（黄口）+袋  
赭（赤口）、墨、古代袋赭
- f 胡粉、胡粉+墨+袋赭  
（黄口）
- g 袋赭（黄口）（赤口）+古  
代袋赭、墨、胡粉+墨
- h 黄土
- i 弁柄、胡粉
- j 白緑、緑青（No.13~12）、  
袋赭（黄口）（赤口）+古  
代袋赭
- k 胡粉、袋赭（赤口）+胡  
粉、墨
- l 胡粉、袋赭（赤口）+胡  
粉、墨